

教育とは人間形成であり、その方法は様々である。生徒は皆同じというのではなく、一人一人違っている。教師もまたそれぞれで、完璧な人間ではなく常に学び続けている。だから、教師一人一人の性格や考え方、指導方法が違ってきて当然である。教育実習の打ち合わせで2回事前訪問した。2回目の訪問の全校集会で挨拶を行った。そして、その日に初めて指導教官の先生と打ち合わせすることが出来た。他の教育実習生の中で担当の先生との打ち合わせが一番短かったのは私である。内容は「教科書は買わなくていい。準備するものはない。範囲は実習当日で十分です。弁当だけ持ってくればいい。」というものだ。他の実習生と担当の先生とのやり取りを聞くと、「教科書は買っておきなさい。今やっている範囲はここだ。実習生にやってもらう範囲はここで予め準備をしておきなさい。」というものだった。初めて教師によって違いがあることを実感した日である。

教育実習初日、校長先生に実習生全員に対して厳しくも温かい指導して頂いた。それは、朝の職員会議の時間の30分前に行ったにも関わらず、「遅い。」というものである。「教師というものは朝の職員会議に間に合って、ただ単に授業をするだけではない。朝早く来て、資料の整理をし、掃除をし、電話対応をし、生徒を迎える。また、社会人になれば一生懸命頑張りましたは通じない。責任がある。子供たちを育て、守る責任がある。大学生だから実習生だからといって甘い考えをしないでください。それでは子供たちを守れません。」という校長先生のお叱りを頂き、自分の考えが甘かったことを痛感した。教師というのは授業だけではなく、様々な仕事がある。実習生だからと言って、子供と接し、授業や部活動だけを考えるのではなく、教師として責任を持った行動をしなければならないと感じた。そして、次の日実習生は朝礼の50分前に来て、掃除をしてから正門で生徒を迎え、今日の行事を朝礼の前にメモした。

話は初日に戻るが、校長先生のお叱りの後、担当クラス(1年生)へ行き、自己紹介をした。教育実習の授業で考えていたような自己紹介通りではなく、次から次へと間に質問をされた。その後、9時から校長先生からのお話があった。内容は意外にも指導ではなく、「教師に向いているか、向いていないかを見極めることと、ストレス発散など自分自身のコントロールを出来るようになりなさい。」ということであった。校長先生曰く、「教師になった人の中にはすぐに辞めていく人がいる。その人が言うには自分は向いていなかった、しんどいというものだ。教師はストレスが溜まる仕事であるから、自分を上手くコントロールしなさい。また、教師は生徒とだけでなく教師同士、保護者と関わる仕事である。生徒と話せても教師とのコミュニケーションが取れない人がいる。そういった指導能力不足の教師がいると、他の教師がカバーしなくてはならないので、負担が大きくなる。教師に向いていないから悪いというわけではなく、その判断をこの実習期間中に行ってほしい。また、指導能力不足の教師もこの学校にもいるので見てほしい。」ということだ。

次に、生徒指導の先生から生徒指導や学校の組織運営についてお話を頂いた。生徒指導

の先生は私の当時の生徒指導の先生の印象ではなく、意外にも優しくそうな先生であった。生徒指導の内容は「特定の生徒と関わらないこと、メールアドレスなど交換しないことなど注意や生徒に厳しく叱るだけが指導かと言えばそうではなく、様々な方法がある。」といった内容であった。私が印象に残った話は学校の組織運営の話である。担当の先生曰く、「学校は組織で行動するところである。子どものために宿題は一切なし、といったような先生がいれば、他の先生は宿題を出すから悪いと思われる。部活動もそうである。そういった偏りが他にもたくさんあると学校としては運営が厳しい。それぞれの先生の良いところがあり、最大限尊重すべきだが、組織として行動するというのも大切であることも覚えていてほしい。先生同士、連携し学校が上手くいくのである。また、私が新任だった頃、他の先生に輝いているなどと言われた。それは褒め言葉だと思っていた。しかし、年を取るに連れてわかってきた。先生が輝くのではなく、子どもが主体となり、輝く様な教師になるべきだ。子どもが輝けるのであれば教師は輝かなくていい。」ということだ。

校長先生と生徒指導の先生の話聞き、教育は一人でするものではなく、学校で組織的に行動するものだという事を学んだ。子どもから人気の教師だけがいい教師ではない。保護者から信頼のある教師だけがいい教師ではないことを学んだ。しかし、あくまでそれぞれの先生方のやり方・スタイルは尊重すべきであると思われる。そして、事後報告会でも発表で「私は教師になって、自分のやり方が正しいということを証明する。」とおっしゃっていた。自分のスタイルを貫くことも大事だが、組織的に活動する学校で自分が正しいという主張はいったんしても、しすぎないようにしなければいけないと感じた。

教育実習で初めて教師の立場に立ち、先生方の授業を見るのは初めてで今までの見方と違った。私の担当の指導教官は教科書を使わずに、授業をする先生で、とにかく生徒とのコミュニケーションや前を向かすことを考えている。教科は数学で、数学と言えば苦手意識をする生徒が多いイメージである。しかし、子供たちは後ろで見学している私に「どう？〇〇先生の授業面白いやろ。」と言ってきたのである。確かに、その先生の授業は面白く、クイズ形式にし、何人かの生徒にあてたり、何かに例えたり、冗談も交えた授業だった。それだけでなく、板書は数学にも関わらず、黒板を消さない量で机間巡視も行っていた。授業の雰囲気は堅苦しい印象ではなく、和やかで賑やかな雰囲気であった。また、3年生の数学の先生の授業を見ると違っていた。教科書を使い、板書の配置にもこだわりが感じられ、机間巡視を行っていた。授業の雰囲気は堅く、先生も細かく注意をしているが、その分生徒も授業を聞いている様子であった。

実際、私が授業を行ったのは1週目の4日目からである。事後報告で指導教官と不仲など様々な発表があったが、私はそうではない。自由にやらせて頂いた。また、生徒の前で上手く授業が出来るか不安であったが、その不安を取り除いてくれるかのように気軽に励まして頂きました。実習が終わるのが金曜日で来週の月曜から中間テストであり、テスト範囲など意識していたので、「どこまで終わらせないといけないですか。」という質問に対して、「気にしなくていい。好きなところで終わればいい。期末もあるし、何とだってなる

から。」と心強い励ましを頂いた。だから、ノートで授業を進めていたが、ワークシートを作って授業を行った。初めての授業は意外にも大きな失敗はなく、担当の指導教官からも細かい指導だけであった。よく1回目より2回目、2回目より3回目の方が上手くなると言われているが私の場合そうではなかった。同じようにあるいは反省点を改善して授業を望んでもそうではない。それは、クラスの雰囲気が違うからである。他のクラスで成功しても今のクラスで成功するとは限らず、賑やかなクラスは賑やかさを生かし、静かなクラスはその雰囲気を保ちながら授業をすることを考え、実行した。クラスの雰囲気を考えずに、自分の授業計画に全てそるのではなく、それぞれのクラスのよさを生かして授業をすることは大切だと学んだ。確かに、指導教官の先生の授業の見学で、同じ授業でも細かく違っていた。そのことを経験できた。

他の実習生が指導教官に厳しく指導されている現場をよく見かけていた。その指導教官の先生の考え方は、教師になるまでに自分の出来る事を増やすために色々細かいアドバイスをしていた。例えば、数学の因数分解の授業で毎回同じ公式を書いて時間が足りなくなるのではなく、画用紙に書いて用意しておく。磁石も毎回それぞれに貼るのではなく、その画用紙の裏に両面の磁石を貼り付けておくとスムーズに貼ることが出来るなど細かい指導もあった。私は直接その先生に指導されることはないので、実習生から言われたことを聞き、情報交換をしていた。

また、教育実習中に宿泊学習も経験させて頂いた。宿泊学習は学校の外に出るので、生徒を守らなければならない。SAで駐車場からトイレまで先生方が何人も立っておられたが生徒が迷わないようにするためと事故にならないようにするためと他の学校の生徒との交流(喧嘩)を防ぐためだそう。細かい所にも気を使い、生徒の安全を守っていた。また、常に先生方が連携し、効率よく行事が行われた。また、生徒たちは学校ではみせないような様子も見られた。夜の就寝指導で私も見回りをしたが、単なる生徒が寝たかどうかを確認するためだけではない。各部屋という狭い空間でいじめがないかなどもしっかりと巡視しているのである。教師という立場になることで見える一面もあり貴重な経験となった。

最後に、指導教官の先生に言われたことは「教育実習なんて実際現場に立てば、クソや。色んな先生を見てきたと思う。いろんなやり方があって俺が正しいわけではないが、その先生の完璧な真似なんて出来ない。自分が何をしたいか、何を教えたいかを考え、それが生徒にどう影響を与えたか、どう反応したかを感じ取ることで意味がある。言われたことをやるだけでは意味がない。」ということである。

私自身、教師になり生徒の前に立つとき、何をしたいか、何を教えたいかを考え、それが学校でどこまで組織的に可能であるかを考えて行動したいと思う。